

ジャズシンガー 綾戸 智恵さん

音楽もタマネギも一緒や

私の The Best!



私にとってベストなものってなんやろう。考えたわ。ひいおばあさんの時から使っている包丁もあるし、最近凝っているものっていったら、足袋なんかもそうやねん。でもな……、本当は私、昔から物にはあまり執着がないねん。

それで段ボールを抱えて持ってきたで。タマネギとピーマンや。

タマネギは淡路島産でピーマンは岡山の津山産。立派やろう。うれしいなあ。どちらも知り合いが送ってくれたもんですよ。これを食べたら私が喜ぶだろうな、おいしく食べてくれるだろうなと思うて、毎年こうして送ってくれる。

タマネギやピーマンは私にとってただの食材やない。季節の巡りを伝えてくれる大事なもんなんや。クリスマスでも、正月でもなく、テレビの前でじゅっくり1年を振り返るんでもない。タマネギが来た！今年も来た！となって、去年は息子にこんなふう料理して出したな、あんな顔して喜んでくれたなと私は考える。1年の時間の流れを教えんねん。料理は好きや。料理というより、おもてなしが好きなんやな。喜んでもらえるのが、なによりうれしい。

タマネギもピーマンも、どちらも食べたらなくなってしまうもんやけど、形がなくなってしまうても私に元気をくれる。栄養を与えてくれて、血となり、肉となつて、さらに次の世代に引き継がれていく。

音楽も一緒や。どうして音楽なんて形が残らないものにお客さんはお金を払うんだらうって考えるんや。だって、私の音楽を聴いて家に帰って、血液検査をし

たつて、その前と後でなにも結果は変わらないやろう。そやけど、お客さんは「うれしかった」とか元気がなったとか、言うてくれはんねん。

私もタマネギやピーマンと同じようなものを売ってるんやな。形には残らないけれど、その人の中に残るもの。そして次の世代に引き継がれるもの。パティ・ペイジさんがおつて、江利チエミさんがおつて、「テネシー・ワルツ」を歌ってきたそうした先輩方がいばらの道を開拓してくれたから、私はいま、歌ってるんや。

長年使ってきた物をなくさないように大事にすることはもちろん大切や。大切やねんけど、それだけじゃない。消えて、形なくなるものにもすっかり役割はある。だから私もこれからすっかり道をつくります。私もいつか消えてなくなるけれど、そのとき、私の後輩か、誰かがテネシー・ワルツを歌うんや。血縁や遺伝子だけじゃない。タマネギやピーマンが届くと世代を超えたつながりも感じるな。

私のことをずっと忘れないで思ってくれて、毎年送ってくれる。その気持ちは、ほんまにうれしいよなあ。

(聞き手・斎藤健一郎 写真・伊ヶ崎悠)

あやど・ちえ 1957年、大阪府出身。17歳で単身渡米し、40歳でデビュー。魂のこもった歌声とステージが人気となり、46歳のとき「テネシー・ワルツ」で紅白初出場を果たす。「綾戸智恵 LIVE2023『Hana Uta』」が9月17日には東京・浜離宮朝日ホールで、10月28日は神戸朝日ホールで開かれる。